

ブルッフ：ヴァイオリン協奏曲第1番ト短調 Op.26

技巧に満ちた独奏パートとオーケストラが、丁々発止のやりとりをしながらともに音楽を創り上げていく音楽、それが協奏曲だが、ドイツ・ロマン派の協奏曲では、両者がいっそう緊密に結びつきながら楽曲を構築する傾向が生まれた。メンデルスゾーンやブラームスの作品と並ぶこの時代のヴァイオリン協奏曲の代表曲が、マックス・ブルッフ(1838-1920)の「ヴァイオリン協奏曲第1番」である。

ブルッフはこの曲を1866年に一度完成したが、満足せず、名ヴァイオリニスト、ヨーゼフ・ヨアヒムの助言を得ながら1868年に改訂版を完成した。新たな初演もヨアヒムのヴァイオリンで行われた。

第1楽章：プレリュード：アレグロ・モデラート ト短調。曲が始まるとすぐに、独奏ヴァイオリンがカデンツァ風の旋律を弾き始める。独奏に導かれながら音楽が進み、切れ目なしに次のアダージョに入る。

第2楽章：アダージョ：変ホ長調。甘美な旋律による緩徐楽章。

第3楽章：終曲：アレグロ・エネルギーコ ト長調。同主長調による華麗な終曲。

遠山菜穂美

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます

楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、弦5部、独奏ヴァイオリン（スコア上の表記）